

## 本能、科学、そして宗教（前半）： 物界の自己 性

:

明:  
自己 性のような本能は科学的に 明不可能であり、ダ ウィンの自然淘汰 を覆すものです。前半: 本能の 、そして 物界からの例。

目: [事イスラ ムの真 性を示す数々の ~~神~~存在](#)

より: A.O.

日 6 Sep 2011

集日 30 Sep 2018



生物は、その存 のために繁殖しなければなりません。しかし繁殖するだけでは足りないことが 明されています。なぜなら、生物がその子 に 切な世 を与えなければ、幼体は生き残ることが出来ないからです。言い えるなら、もし生物が子 の世 と保 の必要性を

感じず、それを上手く行えないなら、幼体は自分では何も出来ずにすぐに死んでしまうということです。

自然界を渡してみると、生物の大半は子の保、そしてそれらへの最善の世をするためにくべき自己犠牲をすることが分かります。それは、人によって行われるいかなるものとも比し得ないような自己犠牲を伴う形で行われます。さらに、これらの生物は、子供のには一瞬も躊躇することなく自らの命を危に晒すのです。では、こうした物による自己犠牲はどのようにしたのでしょうか。

化者たちは、生物による自己犠牲（特に子供にするもの）は本能的行であると主張します。ここで用いられる本能とは、何を意味するのでしょうか。

化者たちによる本能の定義は、生物に本来わっている直感的感であるとされています。彼らによれば、蜘蛛、ライオンや小さな昆虫などの内なる声が、の持のために自己犠牲をするようささやくのだ、といます。こうした内なる声の起源についてのし、彼らはそれを「マザネチャ（母なる自然）」であると言っているのです。化者たちの解としては、自然界におけるあらゆる象は、自然の奇であるのするのです。

しかし、自然はそれ自体が石や花、木、河川、山々などの、私たちと同じ造物であるため、こうした主が空虚で意味なのは明らかです。これらの存在から新たな特を持つ生物が生み出されることが不可能なのは明白です。そうしたものは「理性的存在」だからです。

事、ダウイン自身も最も早い期からこの理的破に付いていました。彼は1859年の著作「の起源」において、自身のにする疑念を次のような言で言い表しています：

「今や、それをとしてうことがより都合が良いと考えるようになった。特にミツバチがを作る素晴らしい本能について、それが私のを完全に覆す十分な根として者の多くのをよぎったかも知れない。」（チャルズダウインの起源、233）

科学者による生物研究の結果、それらが 的な共同作 を行なう 的な 和の中で生きていることが判明しました。自然の中に目をやると、それがどこであれ同じようなことを することが出来るはずで。例えば小 たちは、 や のような狩 が群れに近づくと甲高い警告の き声を し、仲 たちに危 を知らせます。しかしそうすることにより、 き声を した は の注意を自分に引き付けることになるのです。この行 は、警告音を した 自身の生存率を相当に引き下げるものです。それにも わらず、そうした は群れの の生命を守るため、自らの生命のリスクを背 うのです。

物の大多数は、子供のためにはありとあらゆる自己 性をいといません。その例として、北 の冬季におけるペンギンの孵化期 が げられます。雌ペンギンは卵を一 だけ み、オスに孵化を任せて海に ります。数カ月 に渡る孵化期 中、雄ペンギンたちは には 速120キロにも及ぶ猛烈な北 の を耐え かねばなりません。卵を てることなく、丸四ヶ月に渡る大きな 性を う雄ペンギンは、 の欠乏から体重の半分を失います。それが数カ月 くにも わらず、 の捕 をせず、卵を守り けるのです。四ヶ月が ぎると雌ペンギンは大量の を抱えて ってきます。雌は を に ごしていたわけではなく、 の 蓄のために いていたのです。雌は胃の中を空にすると、子供の世 役を って出ます。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/255>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。